

## 核拡散、強まる疑念 「闇市場」にちらつく北朝鮮の影

2009年5月26日1時26分

25日に2度目の核実験に踏み切った北朝鮮は、パキスタンやイラン、シリアといった国々の核開発でも、一定の役割を果たしてきた疑いが指摘されている。核不拡散条約(NPT)を揺るがしてきた国際的なネットワークの中で、北朝鮮の影が常にちらついてきた。米国などからは、核技術拡散への懸念の声が出ている。

パキスタンにとって悲願の核兵器の獲得を実現し、「核開発の父」と国民から英雄視されるのが、アブドル・カディール・カーン博士だった。博士は中東を舞台にした「核の闇市場」を主導したとも言われており、そこから北朝鮮とイランが核技術を手に入れたという指摘もある。

カーン博士は昨年、ウラン濃縮に使われる遠心分離器がパキスタンから00年に北朝鮮へ提供されたと証言した。当時、国軍の参謀総長だったムシャラフ前大統領は否定するが、博士は、遠心分離器は前大統領の「完全な同意」のもと、軍の監督下でパキスタン国内で北朝鮮機に運び込まれ、輸送されたと明かした。

パキスタンは北朝鮮から同国の中距離ミサイル「ノドン」の技術提供を受け、核実験直前の98年4月、中距離弾道ミサイル「ガウリ」の発射実験に成功した。このため、パキスタンと北朝鮮が、互いに持つ核とミサイル技術を交換した可能性も指摘されている。

パキスタンは98年以降、核実験を行っていないが、短、中距離ミサイルや新開発の巡航ミサイル「ロード」などによって核攻撃が十分可能な能力を持っているとされる。

核兵器が、パキスタン国内に浸透しているタリバーンなどイスラム過激派の手に落ちる可能性を懸念する声は消えない。一方、過激派掃討作戦のためにパキスタンへ提供されている米国からの資金援助が、核開発促進に流用されることを心配する見方もある。

イランのアフマディネジャド大統領は25日の記者会見で、「我々は核兵器の製造、拡散、使用に断固反対している」と述べ、北朝鮮との核やミサイル分野での協力を否定した。弾道ミサイル開発でイランと北朝鮮が協力していることは、専門家の間では常識だが、イランは同列での「脅威」扱いを嫌がる。

イランは秘密裏に続けてきた核開発の存在が02年に発覚して以来、一貫して核兵器保有への願望を否定してきた。今年4月には、中部イスファハンに完成した原子力施設で燃料棒製造施設を報道陣に公開し、核燃料サイクルの完結をアピール。自国の原子力開発を「平和利用だ」として、着々とウラン濃縮活動を拡大してきた。

同じ中東で、シリアは北朝鮮とミサイル技術をめぐって協力関係にあった。やはり核開発でも協力しているとの疑惑が浮上している。

07年9月、イスラエルがシリア東部アルキバルの「核疑惑」施設を空爆。米国は08年4月、この施設は、兵器級プルトニウムの生産目的で北朝鮮の支援を得て秘密裏に建設中の黒鉛減速炉だったと発表した。

国際原子力機関(IAEA)は同年11月の報告書で、施設の跡地から採取した環境サンプルから微量のウラン粒子が検出されたことを確認。天然のものではなく、人工的に化学処理されていたと指摘した。シリア側は、核開発とは無関係の軍事施設だったとして疑惑を否定。イスラエルが空爆に使ったミサイルに劣化ウランが含まれていた可能性があるとして主張している。

ただ、見つかったウラン粒子が劣化ウランや濃縮ウランではなかったことから、天然ウランを濃縮せずに加工した核燃料によるものだった可能性も指摘されている。北朝鮮の寧辺には、この種の核燃料を加工する施設と黒鉛減速炉があり、ウラン粒子検出で、北朝鮮が核燃料を提供していた、との見方も出ている。(イスラマバード=四倉幹木、テヘラン=吉武祐、カイロ=田井中雅人)